

なん  
「何でも運送業」

□登場人物

成瀬達彦	店長
早乙女弘	店員
三澤亜希子	店員
吉岡ちはる	アルバイト
日詰哲也(男)	強盗犯
原田結花(女)	強盗犯

物流会社「何でも運送業」の仕分け場。  
舞台奥に段ボールが所狭しと積みあがっている。

上手奥に、小さなテーブル。

テーブルの上に電話と小物入れ。

達彦と弘が入ってくる。

達彦と弘、段ボールを仕分けして、下手側の二か所に  
積んでいく。

仕分けが終わると、地図を広げて、小包のあて先を調  
べ始める二人。

達彦、住所を調べ終わり地図を置く。

電話が鳴る。

達彦、さつと電話に駆け寄り、受話器を取る。

達彦

はい、こちら何でも運送業です。……ええ、何でも運びます  
よ。郵便局や黒猫さんに頼めない、中身が知れたらまずい物  
だって配達します。秘密は必ず守りますから安心してくださ  
い。

弘、段ボールを積もうとするが、手をすべらせて落と  
す。

達彦

おいっ！

弘、手を振って謝る。

達彦

いままでどんな物を運んできたかって？ それは具体的には  
言えませんがねえ。でもかわいいところで、犬とか猫とか。ひど  
い飼いがいるんですよ。うちの犬を保健所まで運んでくれ  
って頼んでくるんだから。まあ、引き受けましたけどね、あん  
まり気持ちのいい仕事じゃありませんでした。……ええ、お待  
ちしてますよ。ただ荷物の中身は、事前にこっちで確認するこ  
とにしていますから。突然、段ボールの中で拳銃が暴発しても困  
るんで。そういうものには「危険物」ってシール貼って、慎重  
に取り扱うことにしてるんです。あつ、拳銃っていうのは例え  
ばの話ですから、気にしないでください。  
……はい、それではのちほど。

達彦、電話を切る。

弘

あんまり調子に乗って、ぺらぺらしゃべらないでくださいよ。  
拳銃運んでるなんてばれたら、警察に通報されて面倒なことにな  
るでしょ。

達彦

実際、そういうものだって運んでるんだから、仕方ないだろ。  
つい口がすべったんだよ。

弘

この前の家族全員、北海道まで運ぶっていうのは、俺たちの仕  
事だったんですかね。あれは夜逃げ屋のやることでしょ。何で  
も運送業が、ただの何でも屋になってきてるような気がするん  
ですけど……。

達彦

仕方ないだろ、仕事として頼まれたんだから。まさか、段ボ  
ールの中に人を梱包するとは誰も思わないだろ。俺たちのおかけ  
で、うまく夜逃げできたんだから、それでよかったんだよ。生  
きてる人間だって運ぶんだよ、俺たちは。

そこへ、下手から三澤亜紀子が入ってくる。

亜紀子

あのさ、ぐちゃぐちゃしゃべってないで仕事しなさいよ。あた  
し、もう、車出しちゃうよ。

弘

亜紀子、俺、午前中、荷物多いんだよ。少し応援してもらわな  
いと困る。

達彦

弘、お前、さっき落とした段ボール、中身大丈夫だろうなあ？  
注射針ばっかりだから、大丈夫ですよ、届け先、山梨の山中で  
す。

亜紀子

それ、不法投棄だね。

弘  
達彦  
亜紀子  
達彦  
亜紀子

俺は依頼人が書いた住所に荷物を運ぶだけ。  
やばい荷物はどんどん出せ。  
中身知らなければ、罪悪感にさいなまれなくて済むんだけど  
ね。  
亜紀子、もし注射針が運んでる最中に段ボールから飛び出て  
きて、病気でも移ったら大変だぞ。中身はちゃんと教えても  
らわなきゃ、おっかなくて配達できないよ。  
まあ、そりゃあ、そうだけどさ。

上手から、吉岡ちはるがスーツ姿で入ってくる。

ちはる  
達彦  
亜紀子  
達彦

おはようございます。  
おっ、おはようさん。  
誰？  
今日から、事務のアルバイトとして、何でも運送業の仲間にな  
つてくれる吉岡ちはるちゃんです。俺が外に出ちゃうと事務  
所に誰もいなくなっちゃうでしょ。だから、電話番号とか、  
経理とかやってもらおうと思ってるね。彼女、簿記の資格持っ  
てるんだ、適任でしょ。

ちはる  
亜紀子  
ちはる  
亜紀子  
ちはる  
亜紀子  
達彦

吉岡ちはるです。趣味はバレエとバイオリンです。ちなみに  
アルバイトは初めてです。ここで働いて社会勉強させてもら  
おうと思ってます。よろしくお願いします。  
年、いくつ？  
えっと、二十歳です。  
二十歳でバイト初めてなの？  
はい。

(あきれて)「はい」って……。  
彼女ね、あの吉岡財閥のご令嬢さんなの。ちよっとピントが  
ずれてるところがあるけど、お嬢様だから勘弁してあげて  
よ。

弘  
達彦  
亜紀子  
弘  
達彦  
亜紀子

(冷たく)そんなお嬢さまに、うちの仕事が理解できるん  
ですかね。  
弘、頼むよ。歓迎ムード作ってよ。仕事の内容はちゃんと説  
明してあるの。秘密も絶対厳守って伝えてある。  
ただ単に店長の好みで雇ったんじゃないの？  
そっか。そういうことか。  
亜紀子、俺は仕事とプライベートはきっちり分けるタイプだ  
よ。好みで雇ったわけじゃない。  
こんな世間知らずなお嬢様を雇って、私たちの仕事をほろっ

達彦  
ちはる  
達彦

と誰かに漏らされたら、どうするんですか？  
ちはるちゃんは、そんなことしないよね？  
はい、私は秘密はちゃんと守りますよ。  
ほら。

弘  
達彦  
亜紀子  
達彦

ほんとに大丈夫なのかなあ？  
大丈夫だって。最近、何でも運送業の常連さんも増えてきて  
きてるんだから人手が必要でしょ。

ちはる  
達彦  
亜紀子  
達彦  
弘

もつとほかに適任な人がいるんじゃないの？  
あのさ、これ、普通の仕事じゃないんだよ。そこらへんのお  
ばさん雇ったら、すぐに通報されて大騒ぎになるよ。社会の  
モラルとかに無関心で、ちよつと浮世離れしている、ちはる  
ちゃんみたいな子が、うちにはびつたりなの。  
あの、それって、褒められてるんですか？  
褒めてるんだ。君はうちに必要な人材だ！  
時給いくら？  
七百元……。

亜紀子  
達彦  
弘  
ちはる  
三人  
ちはる  
達彦

七百元！？  
いまどき、七百元のバイトって安すぎるでしょ。  
ねっ、世間知らずでしょ。それで来てくれるんだから、うち  
にはびつたりだよ。  
あの、私、本当にここで働かせてもらえるんでしょうか？  
よろしくお願いします！  
よかったあ、じゃあ、頑張っちゃいますね。  
じゃあね、そのテーブルの席についてもらって、この前、  
説明した通りに伝票の整理をお願いします。あとね、電話が  
鳴ったら、出てね。社員の自己紹介は配達が終わったあと  
で。いま時間ないからね。  
わかりました。

ちはる

ちはる、伝票整理を始める。

弘  
亜紀子  
弘  
亜紀子  
弘

（腕時計を見て）やべっ、もう九時だ！  
弘、あたしの車に乗せるの、どれ？  
適当に、通り掛けに行けそうな荷物、いくつか抜いてほし  
い。  
すぐに出ようと思ってたのに。  
ケチなこと言うなよ。俺だって、そっちの荷物が多い時は助  
けてるだろ。

達彦、弘、地図を見ている。  
亜紀子、下手側の段ボールを調べている。  
下手から、覆面をした男と女が入ってくる。

おいっ！

男 達彦  
（仕分けしながら）ちはるちゃん、お客様だ。

ちはる、席を立って、

ちはる  
い、いらっしやいませ……。

女 ちはる  
ここ、何でも運送業ですよね？

ちはる  
ええ、佐川さんや黒猫さんに頼めないような荷物を引き受けます。

男 ちはる  
ちよっと、車が壊れちゃってさ、金、運んでほしいんだよ。

女 ちはる  
お金？

三億二千万、いますぐ配達してほしいの。いま、私たち、警察に追われているから。

達彦、弘、亜紀子、手を止めて男と女を見る。

男 達彦  
あんたら、何やってきたの？

男 弘  
何だと思う？

男 弘  
銀行強盗。

男 弘  
正解。

女 達彦  
正解でも、あんまりうれしくない。

達彦  
現金輸送車奪って、別の車にお金を乗せ換えるつもりだったのに、その車が壊れちゃったのよ。

亜紀子  
現金輸送車！？

男 達彦  
その車、どこに停めてあるの？

達彦  
表に決まってるんだろ。

弘  
弘、トラックのシートで、覆いかけてこい！

達彦  
あんた、この仕事引き受けるのか？

達彦  
金次第だ。

弘、下手に駆け出ていく。

女 達彦  
いくらだ？

達彦  
何が？

報酬だよ。三億二千万円の運送代。いくら出してくれる？

男 5%、一千六百万円でどうだ？  
達彦 ふざけんな。そんな金で引き受けられるか。どれだけこつちが  
女 リスク背負うと思っただ！  
達彦 じゃあ、倍の三千二百万。それなら文句ないでしょ。  
男 甘い。金と一緒に二人の強盗犯も運ばなきゃいけないんだ。そ  
達彦 の分を上乗せしろ。  
男 あんた本気で引き受けてくれんのか？  
女 危ない橋はいくらでも渡ってきた。ちよつと警察のほうにもコ  
達彦 ネがあるんだ。金さえあればどうにでもなる。  
男 じゃあ、思い切って5千万！！  
女 それは、警視庁のお偉いさんに払い込む金だ。もっと上乗せし  
男 ろ。  
男 だったらこれでどうだ？

男、人差し指を立てる。

達彦 指が一本足りねえんじゃねえか？  
男 ふざけんな。

達彦 だったら、現金輸送車に乗ったまま、逃げ回れ。どつかで捕ま  
女 るのがオチだけだな。

女 (男に) ねえ、ここに頼むしかないよ。代車が壊れちゃった時  
男 点であたしたちの運、尽きてるんだから。  
女 (女に) レンタカーが壊れるなんてことがあっていいのか…

…

女 (男に) 大きなことをやり遂げるためには障害が付きまとうも  
のなのよ。これはきつと神様が私たちに与えた試練よ。

(冷静に) 試練じゃなくて、悪いことした罰だと思っただ。

男 俺だつてやりたくて銀行強盗やったわけじゃねえんだよ。やむ  
にやまれぬ事情があつて、こんな無茶なことを……。

達彦 まあ、事情はあとで聞きますよ。交渉成立しないときは、とつ  
とと出て行つてもらわないと困るからね。人差し指の隣につい  
ている中指を立てるのか、立てないのか、それが問題だ。

男、達彦に向けて中指を立てる。

達彦 (ムツとして) ちはるちゃん、警察に電話して。  
ちはる はい。

男 勘違いするなよ。これから人差し指も立てるから。  
達彦 中指立てて仕事頼むやつがどこにいるんだ。

女

(男に) ねえ、早くしないと、どんどん不利になっていくよ。わかったよ、二億だ、二億。警視庁のお偉いさんに払い込む五千万差し引いても、取り分はあんたたちのほうが多くなる。それなら満足だろ。

達彦

よしっ、交渉成立だ。こりゃあ、大仕事になるな。ちよつと待って。あたしはそれ手伝わないからね。

達彦

なんで？

亜紀子

店長、この仕事、引き受けたら、あたしたちも立派な共犯者になるよ。分け前まできっちりもらっちゃうわけだから。

達彦

運送代だよ、分け前じゃない。

亜紀子

そういうのを屁理屈(へりくつ)っていうのよ。とてもじゃないけど、ついていけない。

達彦

今まで一緒に仕事して、危ない橋渡つてきて、ここ一番の大仕事で逃げんのかよ。

亜紀子

銀行強盗なんてうまくいくわけないでしょ。うまくいった例なんて三億円事件ぐらいしか知らないわよ。

達彦

成功した例があるってことじゃないか。

ちはる

あのお、銀行強盗ってやっていいことなんですか？

男

やっちゃいけないに決まってるんだろ。そんな常識だろ。

ちはる

だったらあ、すぐに警察に行つて、ごめんなさいって謝つてきたほうがいいと思います。間違いの一つや二つ誰でもありますよ。

ねえ、ここの店長、誰？

女

(自分を指さして) 私です。

達彦

このスーツ着てる女の子、クビにしたほうがいいわよ。今の状況が全然わかってないみたいだから。

女

そこがいいところなんです。このちはるちゃんから見れば。銀行強盗なんて大した犯罪じゃないんです。謝れば済むと思ってるんです。

達彦

店長が捕まったら、この会社潰れますよね？

ちはる

潰れちゃうね。

達彦

バイトもやめなくちゃいけませんよね？

ちはる

そうだね、会社がないのにバイトはできないからね。

達彦

だったらあ、この仕事、引き受けないほうがいいと思います。

ちはる

でもね、うちの会社は名前の通り、何でも運送業なんだよ。どんなものでも拒まず配送する。それが大手にはない、うちの会社の強みなんだよ。例え、銀行から盗んだお金でも、お客様に

達彦

運んでくれって頼まれたら、引き受けるのがこの会社のやり方なんだ。

亜紀子  
ちはるちゃん。この人ね、人生踏み外す典型的なタイプだから、よく見ておくといいよ。こんな人間に絶対なっちゃだめはい。

弘、下手から戻ってくる。

弘  
現金輸送車に、シートかけてきました。  
早いね、さすがプロだね。  
弘  
シートで覆っても、めちゃくちゃ怪しいですよ。  
達彦  
亜紀子、うちのトラック、横付けしておいて。道路のほうから怪しい車が見えないように。  
亜紀子  
だから、あたしは協力しないって言ってるじゃん！  
達彦  
上司命令だ。従わないならクビにする。  
亜紀子  
やっつけられるか、バカ！

亜紀子、早足で下手に出ていく。

弘  
店長、いいんですか、追いかけてなくて。  
達彦  
すぐに戻ってくるよ。あいつはここ以外、正社員として雇ってくれるところはないんだから。  
弘  
……。  
男  
おいっ、どうでもいいけど早くしてくれよ。  
達彦  
ちはるちゃん、小包ラベル出して。  
ちはる  
はい。

ちはる、テーブルに戻る。

男  
小包ラベルなんてどこに貼るんだよ。  
達彦  
現金の入ったジュラルミンケースに。  
女  
いらねえよ、ラベルなんて貼らないでくれ。金と一緒に俺たちと運んでくれればそれでいいんだよ。  
達彦  
こっちは仕事として引き受けてるんだよ。あくまで金を運ぶだけだ。だから、ラベルも貼る。  
男  
(男に) ねえ、本当にこの人たち、信用していいの？  
女  
大丈夫だ。前から、この運送屋にはずいぶん世話になってんだ。これが初めてじゃないんだ。  
弘  
えっ、常連さんですか？  
達彦  
やっぱりそうかあ。どこかで聞いたことある声だなあって思ってたんですよ。

弘 ……あつ、もしかして哲さん？  
達彦 ああ、そうだ。その声は哲さんだ。覆面なんてしてるからわか  
らなかつた。  
男 ばれちゃあ、しょうがねえ。そうだよ、山木組の日詰哲也だ  
よ。結花、覆面外せ。顔なじみだ。

日詰哲也、原田結花、覆面を外す。

哲也 よっ！  
弘 うわっ、まじで哲さんだ……。  
哲也 また世話になりに来たぜ、よろしくな。  
達彦 哲さん、俺たちの仲で、別に顔隠さなくてもいいじゃないです  
か？  
哲也 正体がばれないほうがいいと思っただよ。  
弘 なんで、哲さんが銀行強盗なんか……。  
哲也 ちよつと事情があつて、高跳びするカネが必要になつたんだ。  
でもそんなカネ引つ張つてくるあてもねえしな。仕方なく銀行  
強盗に及んだつてわけだ。  
達彦 そっちの女性は？  
哲也 俺と一緒に高飛びする女だ。

哲也、結花を抱き寄せる。

亜紀子が、下手から戻ってくる。

亜紀子 (不服そうに)トラック移動させました。  
達彦 さすが亜紀ちゃん。俺は信じてたよ、お前ならやってくれるっ  
て。  
達彦 言っておきますけど、私はただ車、移動させただけですから。  
あとは何もしません。  
達彦 昔の男の依頼でも？  
哲也 それ、どういう意味？  
亜紀子 よっ、亜紀子！  
哲也 げっ、哲也！  
亜紀子 お前にはすぐばれると思ったけどなあ。けっこう鈍感だな。ま  
たシャブやつてんのか？  
結花 やつてねえよ！  
哲也 ちよつと、哲ちゃん、何これ？  
結花 何って？  
(亜紀子を指さして)この人、何？

哲也 ああ、こいつは俺の昔の彼女。元カノってやつだ。気にしなくていい。

結花 (亜紀子を見て) ふうん、哲ちゃん、こういう人と付き合ってたんだ。

亜紀子 何よ、あんた何か文句あんの？

結花 ずいぶんガサツな感じだなあって思ってた。

亜紀子 悪かったわね、あんたこそ何よ。人前で肩なんか抱かれちゃってさ。恥じらいってものがないわけ？

結花 いいじゃん。いま哲ちゃんと私は、特別な関係なわけだし。

亜紀子 特別でしょうね。グルになって現金輸送車襲ったわけだから。

結花 意味が違うでしょ！

亜紀子 それ以外のことに関心なし。この人とはもう切れてるの、関係は。

結花 哲ちゃん、信じていいの？

哲也 フラれたの俺のほうなんだよ。だから心配しなくていい。

結花 え、こんな女に哲ちゃんがフラれたの、ショック！

亜紀子 こんな女って、あんたねえ……。

弘 あのさ、今はそんなことで揉めてる場合じゃ……。

亜紀子・結花 うるさい！

パトカーのサイレンが聞こえてくる。

全員、退場する。

パトカーが通り過ぎていく。

哲也 おいつ、早くしてくれ。ぼやぼやしてる場合じゃない。

全員、出てくる。

達彦 弘、お前、車に積んである荷物全部抜いて、そこに現金積みこめ。

亜紀子 今日の配達、どうするの？

達彦 後回しだ。依頼人には、あとから連絡して謝るしかない。

哲也 悪いな。俺のせいで迷惑かけちゃまって。

達彦 いいんですよ。哲さんは、今までこの何でも運送業に割りのいいヤバイ荷物、ずいぶん回してくれたから。そのおかげで闇の運送業として名が知れてきたんです。困ったときはお互い様ですよ。

弘 亜紀子、積みかえるの一緒に手伝ってくれ。どうして私が？

亜紀子

達彦 荷物積みかえるだけだ。罪にならない。  
亜紀子 そうやってだんだんと、共犯者になっていく気がする。  
達彦 もう手遅れだよ。  
亜紀子 ……。  
哲也 荷物、積みかえるんだったら、俺たちも手伝う。  
達彦 よしっ、みんなでやろう。

弘、亜紀子、哲也、結花、下手に出ていく。

ちはる (席を立って) あの、私も手伝います。  
達彦 ちはるちゃん、警察に電話して。  
ちはる えっ?  
達彦 早く!  
ちはる でも、現金運ぶんじゃないんですか?  
達彦 銀行強盗なんてうまくいくわけない。時間稼ぎしてたんだよ。  
ちはる 早く警察が来ないかなあって。  
達彦 だったら、最初に断ればいいのに。  
ちはる いきなり断ったりしたら、あの男がぶち切れて、何するかわからないだろ。優しそうに見えるけど、山木組の日詰哲也っていうのはあつちの世界じゃ、乱暴者で有名なんだよ。  
達彦 本場に警察に電話していいんですか?  
ちはる 荷物積みかえてるうちに早く。  
達彦 わかりました。じゃあ、電話しちゃいます。  
ちはる 頼むね、俺、頑張って時間稼ぎするから。  
達彦 はい。

達彦、出て行こうとする。

ちはる受話器を取る。

結花、拳銃を構えて、下手から入ってくる。

達彦 あっ……。  
結花 やっぱりそういうことか。話がうまく行き過ぎてると思ったのよね。  
達彦 ……。  
結花 ちはるちゃんだったっけ。その受話器置いて。置かないと死ぬことになるわよ。  
達彦 ちはるちゃん、受話器置いて。  
ちはる ……はい。

ちはる、受話器を置く。  
下手から哲也が戻ってくる。

哲也 おいつ、結花。お前、何やってんだ？

結花 哲ちゃん、やっぱりの人たち、信用できない。いま警察に電話しようとした。

哲也 店長、それは本当か？

達彦 はい、間違いございません。

ちはる 銀行強盗なんて、うまくいくわけないと思います。警察に行つて、頭下げてきてください。

結花 黙る！

ちはる はい。

達彦 哲さん、銀行強盗なんかして逃げ切れるわけないよ。

哲也 だったら、どうして引き受けるふりなんかしたんだ？

達彦 うちの大切な店員を傷つけられちゃ困ると思ったからだ。

哲也、ポケットから拳銃を出す。

哲也 じゃあ、お望み通り実力行使だ。荷物を積みかえろ。車はもらつていくぞ。

達彦 哲さん、一つだけ聞かせてくれ。山木組の若頭まで上り詰めた

哲也 あんたがどうして銀行強盗を……。

達彦 そんなことお前に話してどうする？

哲也 うちに回してきたシャブ。あれ、いろんなルートに流してたけど、

達彦 山木の親分は知ってたんですか？

哲也 親分も年食つてさ、暴対法恐れて、麻薬の取引はやめろつて言

達彦 ってきた。でも、俺は取引を続けてた。その話が組に漏れて、俺がシャブの儲けを丸呑みしてるのがバレた。

哲也 だったら、高飛びするくらいのお金あるでしょ？

達彦 それがねえんだよなあ。俺つてさあ、持つてる金が不思議とそ

哲也 の日のうちに消えちまうんだよ。

結花 派手に遊びすぎるんだよ、哲ちゃんは。

哲也 遊ぶ時は、徹底的に遊ばないと納得できねえんだよ。お前にだ

結花 って、いろいろやっただろ。

達彦 まあ、マンションも買ってもらったし、指輪や時計もね。

哲也 もつとうまいやり方なかったんですか？

結花 時間がなかったんだよ。組の連中が俺のことを探し回ってる。

哲也 ヤクザと警察の両方に追われてるなんて、なかなかスリリング

達彦 だろ？

弘と亜紀子が入ってくる。

亜紀子

えっ、なんなの、この状況。

哲也

店長が警察呼ぼうとした。だから、こんな状況だ。

弘

(落胆して) 店長、何やってんですか……。

達彦

銀行強盗なんてうまくいくわけないだろ。

哲也

弘、積み込み続ける。結花、お前、こいつらと一緒に行け。俺

結花

はこつちを見張ってる。

結花

わかった。

結花、弘と亜紀子に、あごで合図する。

弘、亜紀子、結花と出て行く。

電話が鳴る。

ちはる、すぐに受話器を取る。

哲也

電話を取るな。動くんじゃねえ!

ちはる

でも、電話が鳴ったから。

哲也

そういうことじゃねえだろ。場の状況考えろよ。

達彦

ちはるちゃん、受話器置いて。

ちはる

はい。

ちはる、受話器を置く。

また、電話のベルが鳴る。

しばらく鳴り続けて、電話のベルが止まる。

結花が両手を上げて部屋に戻ってくる。

哲也

結花、見張つとけって言っただろ?

結花

だって、機関銃持ってるんだもん。

哲也

誰が?

弘

俺です。哲さん。

弘、下手から機関銃を持って入ってくる。

哲也

なんで運送屋が機関銃持ってんだよ!

弘

今日の午前中に中国マフィアに届けることになっていた超危険物です。

哲也

弘、お前、兄弟の俺に機関銃向けるのか?

弘

俺があんたの舎弟だったのは、昔の話です。

哲也

おいつ、弘、よく考えろ。俺が警察に捕まったら、お前らがや  
つてたことも全部、バレるんだぞ。そしたらお前らも全員、豚  
箱行きだ。それでもいいののか？

達彦

ばれてもいいんです。

哲也

どういう意味だ？

達彦

日詰哲也、強盗および銃刀法違反で逮捕する。

哲也

犬の真似なんかするんじゃないか。何考えてんだ？

達彦

真似じゃなくて、俺は本物の犬だ。

達彦、ズボンのぽ家とからゆっくりと警察手帳を出し  
て、哲也に見せる。

哲也

おいつ、店長。あんた一体、何者だ？

達彦

東京警視庁特捜部第9課、密輸密売捜査官、成瀬達彦だ。

哲也

おいつ、犬が密売の手助けしてどうするんだよ。

達彦

あんたのおかげで、麻薬の密売ルートは、ほぼすべて把握し  
た。三日後には一斉検挙だ。今は拳銃の密売ルートを探って  
る。だから機関銃も箱から出てくるってわけだ。

哲也

じゃあ、お前、最初から俺をはめてたのか？

達彦

霞が関の警視総監殿が、闇の流通ルートを探るには、そのルー  
トに潜り込むのが一番手っ取り早いと考えていて国民の皆様  
の税金でかなり強引にぶっ建てた会社が、この何でも運送業だ。  
刑事が、元シャブ中女とヤクザ上がりを雇ってんのか？

哲也

二人とも裏社会の事情には精通してた。だから、社員として雇  
うにはうってつけだった。

哲也にスポット。

ヘリコプターの音が響く。

達彦

応援が来たみたいだ。日詰、拳銃を捨てろ。

結花

哲ちゃん、もう無理だよ、あきらめよう。

哲也

この男だけは、撃ち殺してから豚箱へ行く！

亜紀子が拳銃を持って入ってくる。

亜紀子

哲也、もうやめなよ。

哲也

亜紀子、お前が警察に通報したのか？

亜紀子

そうよ。

哲也

余計なことしやがって。

亜紀子 刑事撃つたら、二度と刑務所から出れなくなるわよ。  
哲也 お前もこいつが刑事だって知ってたんだな。知ってて俺をはめ  
たんだな。

亜紀子 麻薬の取引をやめてほしかったの。シャブ中になって私みたい  
に人生おかしくなっちゃう人がたくさんいるから。  
哲也 賢くなったな、お前も。

亜紀子 哲也、あんたもバカじゃないでしょ。拳銃下ろしなさい。不幸  
になる女がまた一人増えるから。

哲也、結花を見て、

哲也 ……くそつ。

哲也、拳銃を下ろす。

達彦 刑務所で更生して、まっとうな人間になってシャバに戻ってき  
てください。

哲也 お前の運送屋のほうか、よっぽどまともじゃねえだろ！  
達彦 弘、表まで二人を送ってやれ。強盗犯を刑務所に送り届けるの  
も、何でも運送業の仕事だ。

電話が鳴る。

ちはる、すぐに受話器を取る。

ちはる (明るく) はい、こちら、何でも運送業です！

(幕)

## 「旭警部の苦悩」

□登場人物

あさひじょういちろう  
旭丈一郎警部

やつはしみか  
八橋美香巡査

わかみやまさし  
若宮正志容疑者

明転すると、旭丈一郎警部、八橋美香巡査（書記）、若宮正志容疑者が取調べ室に入ってくる。若宮容疑者を椅子に座らせ、手錠を外す旭警部、八橋警部は少し後ろに置いてあるテーブルに座る。旭警部、若宮容疑者の向かい側の席に座る。

旭 それじゃあ、始めようか。

若宮 よろしく願います。

旭 後ろにいるのは、書記の八橋巡査だ。

若宮 わかりました。

旭 パンツ盗んだのか？

若宮 ……はい。

旭 どうして盗んだ？

若宮 内から湧いてくる衝動を止められませんでした。

旭 ちょっと待て。そんなに簡単に罪を認めちゃいけない。

若宮 えっ？

旭 パンツだぞ。いまだき下着泥棒なんてなかなかやらないぞ。こんな簡単に罪を認めていいのか？

旭 あの、おっしゃってる意味がわかりませんが。

八橋君！

旭 はい！

八橋 今から、彼が言うことは書かなくていいですから。

旭 えっ？ よろしいんですか？

八橋 上司命令だ。

八橋

でもすね……。

旭

八橋君、私が何も知らないと思ってるのかね。いいのかな

八橋

……。

旭

嫌だよねえ、働きづらくなるよねえ。どつちかは転勤になるよねえ。転勤だけじゃすまないかもしれないねえ。

旭

あの、それだけは勘弁していただけますか？

若宮

もちろん、勘弁するよ。それが僕と君のためだから。それで

旭

さあ、若宮。パンツ盗んだのか？

若宮

盗みました。

旭

女子大生のあのフリフリのたくさん着いたやつか？

若宮

それを盗みました。

旭警部、若宮をボードでひっぱたく。

旭

そうじゃないだろう。

八橋

あの、容疑者への暴行は固く禁じられているはずですが！

旭

それは、外にばれたらでしょ。君も僕も若宮も黙っていれればいいんだ。若宮、黙っていられるよな。それが、君のためだ。

八橋

おっしゃってる意味がよくわかりませんが。

旭

わからなくていい！これは私と若宮の問題だから。

八橋

はあ？

旭

若宮、悪いことは言わない。容疑を認めるな。

若宮

認めなくていいんですか。

旭

認めなくていい。お前は真面目すぎるんだよ。警察に言われたら、「はい、やりました」って、それじゃあ、つまらないだ

若宮

ろ。取調べすぐ終わっちゃうもの。

若宮

でも、やってしまったのは本当ですし、現行犯で捕まりました。

旭

違う、君はパンツを盗もうとした訳じゃない。君は路上で転

若宮

び、怪我を負い、止血するために近くにあったパンツに手を伸ばしたんだ。

若宮

いえ、私は路上で転んでいません。

旭

旭警部、若宮をまたボードでひっぱたく。

旭

何度言わせればわかるんだ。容疑を認めるな、と私は言ってる

若宮

んだ。

若宮

否認していいんですか。

旭 当り前だよ、君には黙秘権というものがあるんだ。容疑者に認められている権利を行使しなくてどうする。権利を行使するなら……。

若宮 今でしょ……。

旭 いい子だ。よくわかったかな。

若宮 よくわかりませんが、否認していいなら否認することにします。

旭 じゃあ、あのフリフリのパンツ、盗んだわけじゃないんだね。  
若宮 はい、私は盗んでいません。止血のためでした。

#### 旭警部、八橋巡査に

旭 今の書いて。書記。

八橋 あの、この取調べがどうしてこういう方向に向かっているのか

まったくわかりません。下着泥棒を警部は逃がすおつもりなんですか？

旭 八橋くん、難しいことは考えなくていいんだ。君はまだ警官になつて日が浅い。先輩のやり方をよく見ておくんだ。とにかく書けつて言ったものは書け。

八橋 納得できません。

旭 いいよ、じゃあ、あれバラしちゃうから。

八橋 すいませんでした。今すぐ記録いたします。

旭 いいよ、八橋君。君はなんてかわいい猫なんだ。ニャンニャン！ 夜もニャンニャン言ってるのかな？

八橋 ……。

若宮 完全にセクハラだわ。

旭 パンツ泥棒が、偉そうにセクハラとかほざいてんじゃねえ！  
若宮 そうです、だから僕がやったんです！

旭 やつてない！ 下着なんて俺がいくらでも買って、お前にくれてやる。だから、とにかく否認しろ。

若宮 いや、新品のパンツには興味ないです。一度は使ったやつじゃないと。

旭 じゃあ、俺が全部、一度履いてから、お前にやるよ！

若宮 女の子が履いたパンツじゃなきゃだめなんだ！

旭 この変態野郎め！ 君、家族がいるらしいじゃない。

若宮 はい、妻と娘が一人います。

旭 こんなことして逮捕されたら、一家離散だよ。君は何としてでも容疑を否認し、無罪を勝ち取らなければならないんだ。こんな優しい刑事さん、なかなかいないよ。

若宮

そうですね……。

旭

止血だ。止血のためにしよう。傷はあとから俺がつけてやる。

若宮

刑事さん、どうしてそんなに僕のことをかばってくれるんですか？

旭

そりゃあ、お前。奥さんと娘さんが、腹を空かしてお父さんの帰りを待っているというのに豚箱にぶち込むわけには行かないだろう。

八橋

私、ちよつとおトイレ行っていいですか。

旭

書記が席を外しちゃいかんだろ。

八橋

どうせ、全部書けないじゃないですか。

八橋巡查、席を立って出て行く。

若宮

兄さん……。

旭

兄さん？

若宮

兄さん、ありがたいよ。こんな変態な僕をかばってくれて。

旭

この馬鹿野郎！俺はお前の兄さんじゃない。

若宮

兄さん、本当にごめん、こんな迷惑かけて。

旭

だから俺はお前の兄さんじゃない。俺の名前は旭丈一郎、お前の名前は若宮正志だ。

若宮

僕は旭正志だよ。養子縁組で今は若宮だけど。

旭

そんなことはわかってるんだ、何やってるんだ、弟よ。

若宮

兄さん！

旭

弟よ！

旭と若宮、抱き合う。

が、旭はすぐに若宮を振り払って

旭

とんでもないことをしてくれたもんだよ、お前は。

若宮

兄さん、ごめんなさい！

旭

よりにもよって、弟の取調べを兄の俺がやることになるなんて。

若宮

俺もまさか兄さんが出てくるとは思わなかったよ。

旭

いいか、正志、良く聞け。俺は今は警部だが、ゆくゆくは、署長の席を狙ってる。もしも血のつながった弟がパンティー泥棒なんてバレた日には俺の出世街道も「THE END」だ。お前には何としても無罪を勝ち取ってもらわなければならぬ。

若宮

どうすればいいの？

旭

さつきから言ってるだろう。止血のために致し方なくパンツを

手に取ったんだ。

兄さん、こんなことになってすまない。パンツを盗みたいという衝動をどうしても止められなかったんだ。

お前、ぶっちゃけたところ、何回やってんだ？  
何を？

下着泥棒に決まってるだろ。

正直に言っているの？

いまは書記の八橋がいない。正直に言っている。

30回くらい……いや、40回かな。

馬鹿野郎！ もう筋金入りのパンティー泥棒じゃねえか。弟じゃなかったらシバキ入れてんぞ、この野郎！

ごめんなさい、兄さん、本当にごめんなさい！

でもよかったよ、取調べ官が俺で。こんな案件は俺の腕でひねり潰してやる。

ありがとう、兄さん。そこまで俺のことを……。

馬鹿、お前じゃない。俺の人生がかかってんだよ。お前みたいなパンティー泥棒がどうなるうが俺の知ったことじゃない。兄弟じゃなかったらすぐに豚箱にぶち込んでる。

……兄さん、冷たい。

冷たいに決まってるだろ。兄は刑事。弟はパンティー泥棒。ばれたら出世どころか署にいられなくなっちゃうよ、俺は。

いま、思えば20年前、大学受験をあきらめざるをえなかったところから僕の人生は狂ってきた。兄さんが国立じゃなくて、私立の大学なんかに行くから、僕が大学に行くお金がなかったんだ。

大学に行けなかったこととパンティー泥棒と何の関係もないだろ。

いや、僕の人生はそこから狂ってきたんだ。高卒の俺は安月給の会社に入り、ろくに遊ぶ金もなく、致し方なくパンティーを盗むようになったんだ。

普通、致し方なくパンティー盗むようにならんだろ。それはお前の特殊な性癖以外の何者でもない。

いいよなあ、兄貴は警察署勤務の刑事で、給料も良くて、ボーナスも出て、安定した暮らしを手に入れてる。

その安定した暮らしが、いま、お前のせいで台無しになろうとしてるんだよ！

兄さん、俺、正直に話して捕まるわ。

何？

兄さんの人生をこの僕がめっちゃめっちゃにしてやるよ。俺のほう

若宮

旭

若宮

旭 旭が頭良かったのに大学行けなかったのは兄さんが私立の大学に入る頭しかなくて金がかかったせいだ。そうだ、こんな境遇になったのは兄さんのせいなんだ。

旭 ちよつと待て。話が違おうほうにずれてる。冷静になれ。そんなことしたら俺の人生もお前の人生もどちらもおかしくなるだろ。死んだ親父に顔向け出来ねえよ。

旭 若宮 もう僕はとつくに顔向けできなくなってる。

旭 若宮 正志、落ち着け。冷静になれ。人生なんてどこからでもやり直すことができるさ。「笑顔を忘れないで輝いていよう、そして思いつき生きていこう、きつといいことがあるはずだから」。

旭 若宮 何、それ？

旭 若宮 20年ほど前に警察の研修所で、教官から教わった言葉だ。

旭 若宮 全然、胸に響いてこないよ、兄さん。いいことなんて俺の人生にはきつとないんだ。

旭 若宮 そんなことはない。今が最低なだけだ。別に人を殺したわけでもなく、誰かを騙したのではなく、ただパンティーを盗んだだけだ。やり直しなんていくらでもできる。

旭 若宮 兄さん！  
弟よ！

旭 旭警部と若宮容疑者が抱き合う。

旭 八橋 八橋巡査が入ってくる。

八橋 八橋 ふっ、ふっ、ふっ……。

旭 旭と若宮、すぐに離れる。

旭 八橋 なんだ、八橋君、うすら笑いを浮かべて。

旭 八橋 トイレ行くふりして、全部聞いちゃいました。ちよつとだけ扉開いてたの気付きませんでした？

旭 八橋 いや、今のは、あれだ、兄弟ごっこっていうか、若宮を落ち着かせるために兄さん役を引き受けただけなんだ。

旭 八橋 ふんっ、そんな取調べの仕方なんてあるわけありません。なんだよ、お前もスキヤンダル案件持つてるじゃんかよー。

旭 八橋 八橋、お前、上官に向かってどういう口の利き方してるんだ。このアホがよお。全部、ばらしてやるよ。

旭 八橋 そんなことしたら、私も君が交通課の巡査部長と不倫関係にあることを話すからな。

八橋

そう来ると思つてました。という事で、今まで劣勢で何も言えなかった私の立場はイーブンになりました。私は不倫、旭警部はパンティーの件、取引しましよ。

旭

不倫とパンティーで条件を交換しようってわけだ。

八橋

お互いにとつてウィンウインの関係になりますがどうします？警部、出世したいんですよねえ。弟が前科ありじゃ、署長なんて夢のまた夢になりますよ。

旭

八橋君、君もなかなかやるね。よしっ、いいだろう、これでイーブンだ。いいよな、若宮。

若宮

何が何だかよくわからないけど、兄さんがいっていうならそれでいいよ。警察に入るために署長の叔父に、国家試験の面接をお金で優遇してもらつた件は黙っておくよ。

旭

なんの話かな。っていうかなんでここでそんな話した？

八橋

国家公務員試験、お金で合格したんですか、旭警部！

旭

違う、俺はそんなことしてない。

八橋、何かを記帳する。

旭

八橋、いまの記録しただろ、消せ。

八橋

いえ、消しません。私、これで圧倒的に有利になりました。

旭

不倫のこと言うぞ！

八橋

どうぞ、おっつしやってください。その変わり、あなたにはパンティー泥棒の弟がいて、国家公務員試験はお金で合格したとバラシちやいますんで。

旭

バラされたら、俺、どうなっちゃう？

八橋

言わずもがな。クビです。

旭

八橋君、君と僕はそんな関係じゃないだろう。もっとフレンドリーに行こうよ。人間なんてさ、はたけば埃の一つや二つはあるものじゃない。っていうか若宮、お前、どうしてそんなこと突然言い始めた？

若宮

兄さんのせいで僕は大学に行けなかった。

旭

またその話かなあ、もう兄さん、疲れたよ。許してくれよ。

若宮

正直に罪を認めようと思つてたけど、だんだん腹立ってきた。不正受験で警官になった兄さんに、パンティーを盗んだこととやかく言われる筋合いはないんだ。

旭

だから、最初から、無罪にしようとしてるじゃん。お前が真面目にあっさり認めちゃうから、兄さん、頑張つてたんだぞ。

八橋

二人が兄弟だなんて最初はわかりませんでした。弟さんはお嫁さんの養子縁組に入ったから、旭ではなく、若宮という姓にな

つていたんですね。

八橋さん、僕は、逮捕されなきゃいけないのは、私ではなく兄のほうだと思うんですよね。

いえ、二人とも逮捕ですね。

八橋君、どうか二人を許してください。こんなバカな兄弟をどうにか許してもらいたい。

最初の態度が問題なんですよねえ。俺はお前の弱み握ってるぞ、的な態度。

その態度につきましては、いま振り返れば、本当にひどかったと反省しております。どうか、どうか許してください。

どうしよっかなあ。

不倫、ばれたくないでしょ？

警部、刑事やめたいんですか？

嘘です。今のは冗談です。刑事でいさせてください！

二人とも豚箱に入れてえなあ。

正志、何かやれ。八橋さんが喜びそうなことを。

そんな無茶ぶりされたって。

金だよ、金出せ。

そんな、お金だなんて。嫁と子供食わせるだけで精一杯です。

警部は？

君、本当にお金で解決しようとしてるの？

不倫は不倫で金かかるんだよ。男も一人じゃねえしな。

な、なんと！

示談にしてやるって言ってんだよ。

旭警部、財布を出して、全部のお金を取調べ室のテーブルに置く。

八橋

おい、おい、刑事さんよ、そんなはした金で私が納得するとも思ってるのかよ。馬鹿兄弟二人の犯罪を見逃してやろうって言うてるのさ。

旭

八橋君、君、だいぶキャラが変わってきてるよ。なんかすごい圧を感じるよ。

八橋

オーラって言え、バカ。

旭

若宮、お前もいくらか出せ。取調べ中に容疑者が金出せるわけねえだろ。

八橋

いや、家に帰ってもらえれば、少しはあるだろうから。だから、あたしが納得しなかったら、若宮は帰れねえだろうが。

若宮

八橋

旭

八橋

旭

八橋

旭

八橋

若宮

八橋

旭

八橋

八橋

八橋

八橋

八橋

八橋

八橋

八橋

旭 そうですね、そうでした、ごめんなさい。

全員 ……。

八橋 なんだ、この沈黙は？

若宮 いや、八橋さんがすぐくって。元ヤンキーとかですか？

八橋 ヤンキーなわけねえだろ。なんでヤンキーが警察の試験受けんだよ。

若宮 そうですよ、ヤンキーは警察行かないかも、ですね。

八橋 まったくこの馬鹿兄弟がよお……。

旭 あの、八橋さん、八橋さんには兄弟はいないのかな？

八橋 いますよ、姉が二人。

旭 ああ、いるんだ。

八橋 それが何か？

旭 いや、もしもだよ、万が一にも、お姉さんの取調べを君がすることになったらどうするのかああって……。

八橋 ……。

旭 ねえ、やっぱり身内はなかなか裁けないよね。

八橋 旭警部、それは私を説得しようとしてるわけですか？

旭 そりゃあ、そうだよ。まず君が協力してくれなきゃ、二人が兄弟だってバレたからにはさ。もう一度聞く。君は、お姉さんを裁けるか？

八橋 うちの姉、二人は犯罪起こすような馬鹿じゃありません。

旭 だから、万が一だよ。俺の気持ちも考えていただきたいんですよ！

八橋 では、答えましょう。姉を万が一にも取調べすることになった場合……私は……姉を逃がします。

旭 だよ、やっぱりそうだよ。なんだ、八橋ちゃん、わかってくれてるんじゃない。

八橋 しかし、いまやっている取調べは私とはまったく関係ありません。今のは私の姉だった場合です。若宮は、私とは何の関係もない人間です。

旭 若宮、もう無理だ。あきらめよう。

若宮 だから、俺は最初からあきらめてたんだって。

旭 少しは兄さんの立場も考えて、否認することくらい頭回らなかつたのかよ。こんな事情聴取、適当にやって、罪はつぶすつもりだったのに。

若宮 だったら、最初からそう言ってくれよ。

旭 だから匂わせてたじゃない。止血するためだったってことにしたかったんだよ。ああ、終わりだわ。俺の出世街道ここで終わ

りだわ。兄弟に前科者がいたんじゃ、もう無理だわ。どうしてくれんだ、この野郎。

すまない、兄さん。俺もまさか兄さんが事情聴取することになるとは思ってたんだよ。

だから、若宮、その辺も俺は微調整してたわけよ。若宮って男が捕まったって情報は俺にも入ってたわけ。それでお前を救うため、いや、自分を守るために、取り調べを志願したわけ。

ああ、もう最初から練り上げられたメンツだったわけですね。私の誤算は八橋君に私の弱点を握られたことだった。巡査部長との不倫ネタで書記を抑え込むつもりだったのに。

ああ、ほんと、どうしようもない兄弟だわ。

八橋 旭  
取調べ、最初からやり直そう。若宮、パンツ盗んだだ、レーズのフリフリのついたやつ。

盗みました。

止血のためじゃないんだよな？

残念ながら怪我は負っていませんでした。

じゃあ、起訴だな。

うん。

旭 若宮  
てめえ、ふざけんじゃねーぞ。奥さんどうすんだよ。娘の真理ちゃんはどうなるんだよ。犯罪者の嫁と娘になっちまうだろ。

俺はパンティー泥棒の兄で出世街道、台無しだよ。親父とおふくろが聞いたたら、泣くぞ、お前。

兄さん、一つ頼みがある。

何だ？

かつ井、一つ、出前取ってくれないかな？

若宮

旭警部、若宮をボードで叩く。

旭

馬鹿！ カツ井っていうのは最後の泣き落としで使うんだよ。お前、もう自分がやりましたって言っちゃってるじゃない。

カツ井なし！

どうしても食いたい。最後に。

なあ、正志、わかってくれよ。弟が取調べ室でカツ井食べてる姿なんてみたくないよ。

そうよ、肉親がカツ井食べてる姿なんて見たくないわよ。

あれっ！

何ですか？

肉親がカツ井食べてる姿見たことあるとか？

私、そんなこと言いましたっけ？

八橋

旭

八橋

若宮

八橋

旭

若宮

旭

若宮

旭

若宮

旭

若宮

旭

八橋

旭

八橋

旭

若宮

旭 うん、いま、力入ってたもん。肉親がカツ丼食べてる姿って。

八橋 ……。

旭 怪しい。

八橋 ……。

旭 八橋君、君の夢はなんだっけ？

八橋 どうしてそんなこと聞くんですか？

旭 それは君、誰しも夢ってものの一つや二つはあるじゃないか。

八橋 例えば、出世とか出世とか。

八橋 ……。

旭 調べちゃおっかなあ、俺。八橋君の家族構成。

八橋 どうぞ、ご自由にお調べください。

旭 あっ、そう。じゃあ、ちよつと出てくるわ。弟は任せた。

旭、取調べ室から出て行こうとする。

八橋 巡査、旭の腕をつかむ。

旭 なになになになに！ ちよつと腕離してよ。

八橋 私のは調べなくていいんです。いまはあなたの弟さんの取り調べをしてるんです。

旭 もしかしてだけどー♪ もしかしてだけどー♪ お前の肉親、

旭 一回、サツに捕まってるんじゃないのー♪

八橋、うつむく。

旭 調べればすぐにわかっちゃうからね。観念するの早かったね。あれは15年前、雪吹きすさぶ網走（あばしり）刑務所の面会室でした。漁師だった父は憔悴しきった様子で私にこう言いま

した。冬のオホーツク海は、流水で漁ができない。腹を空かした子供たちのために、毛ガニを食べさせてやりたいが、毛ガニの漁に出ることもできず、金もない。そこで父は私たち、家族のために、漁港で冷凍されていた毛ガニを3杯、こっそりと盗みだしてきたのです。その日はおいしく毛ガニ鍋をいただきましたが、父は窃盗がバレて逮捕されました。

旭 あんたの父ちゃん、毛ガニ泥棒じゃん！

八橋 ふふふ、毛ガニ泥棒！ パンツのほうはまだマシじゃね？

旭 警部、私の先ほどの無礼な態度、高慢な発言、お許しください。

旭 いいよ、いいよ、許しちゃうよ。だって、もうこうなったら八橋君も私も同じ立場だもの。当然、私に協力してくれるよね。

八橋

父が毛ガニ窃盗犯であることを内緒にしていたくのが条件です。

旭

もちろんだよ。同じ穴のムジナじゃないか。これから仲良くやっつていこう！

若宮

なんかさあ、弱みの握りあい合戦じゃん。

旭

正志、いいか、こうなったら、お前は何か何でも怪我をしてパンティー取ったことにするからな。お前だって、もちろん起訴されないほうがいいだろ？

若宮

もちろんだよ。

旭

これから、お前を渾身の力でこのボードで引っぱたくからな。その怪我の止血だったと言うんだぞ。

若宮

怖いよ、兄さん。怪我させるために思いっきり叩きそうでもない。

旭

それは仕方ない。

若宮

兄さん、痛いのは嫌だよ。僕は、パンティーを盗んだんだよ。今回の一件だけじゃない。たくさん盗んでる。僕はきちつと裁かれなきゃいけない人間なんだよ。ちゃんと反省しなくちゃいけないんだよ。そうじゃないと人生の再スタートが切れないんだよ。

旭

珍しい犯人だな、お前は。裁かれないなんて。

八橋

旭警部、怪我の止血で持っていくますよ。

旭

うん。八橋ちゃんは素直でいい子だなあ。

八橋、ノートに猛烈な勢いで書き始める。

若宮

やだよ、兄さん、俺を逮捕してくれ。

旭

逮捕はされてんだよ。不起訴に持っていくんだよ。

若宮

絶対、こんなことしたらヤバイって。

旭

ヤバイのはお前じゃなくて、俺なんだよ。一に出世、二に出世、三、四がなくて五に出世なんだよ。警部まで上がってき

若宮

て、ここで打ち止めて五に出世にはいかねえんだよ。いいか、弟よ。人生とは、人の世とはきれいことばかりでは進まないように

旭

できてるんだ。無罪の人間が冤罪で捕まり、有罪の人間が逃

若宮

がされる、そんなことが起こりうる社会なんだ。

旭

俺、今回、反省しないと、また同じことやっちゃう気がするよ。そういう性癖なんだもの。

若宮

この変態野郎。次やったら、次も逃がさなきゃいけねえじゃん

旭

か。俺がすっごい苦勞するから、次はやめてくれ。どうしてそ

若宮

んなにパンティーが欲しくなるんだ？

若宮

やっちゃいけないことやっちゃってる感じがもうたまらなくて！

旭

俺もお前もやっちゃいけないことばかりだな！

旭と若宮、抱き合う。

旭

って馬鹿野郎。一緒にするんじゃないやねえ。俺はもみ消しはやるがパンティーは盗まないから変態ではない！いつから正志はそんな変態になっちゃったんだ！

若宮

最近、世の中が、コンプライアンスとか言ってる、法律守れってガチガチの日本じゃん。俺さ、こんなガチガチな社会へのレジスタンスとして、あえてパンティー盗んでるんだよね。

旭

レジスタンス？お前は革命家なのか。パンティーを盗むことで社会に抵抗していると、そう言いたいのか？

若宮

そうさ、僕は真面目にパンティー盗んでるんだ。

八橋

もうパンティー、パンティーうるさい。黙れ！

旭

八橋君、どうかこの弟を許してやってくれ。こいつはどうやら真面目にパンティー盗んでるらしい。

八橋

精神疾患でいけるんじゃないですか？

旭

無理無理無理。理屈と筋は通っちゃってるから。支離滅裂じゃないから。基本、真面目だし。

八橋

真面目な人がいろいろ盗みませんよね？

旭

おっしゃる通り。真面目発言、撤回します。

八橋

お前のレジスタンスのおかげで、どんだけ女性が迷惑してるか考えろや！

若宮

だから、僕は堂々と起訴してくれと言ってるんです。

旭

正志、だからそれは無理だと何度も言ってるじゃないか。兄とはいえ、こんなに刑事が味方になってるんだから、否認しろよ。

若宮

どこかで止まらなきゃいけない。そう思ってたんだけど、ずっと下着泥棒をやめられなかった。兄さん、正直なところ、僕は捕まって、ちよつとほつとしてるんだ。

旭

俺は心臓がバクバク言ってるよ。お前はそれでいいかもしれないが俺の立場がなくなるんだよ。

若宮

兄さん、もう起訴してくれよ！

旭

いやだ、絶対いやだ！

若宮

現行犯で捕まってるんだから、もうそれでいいじゃない。

旭

お前の人生の破滅に俺まで巻き込むんじゃない。昔から正志には粘りが足りないんだよ。すぐあきらめちゃうんだから。書道教室だって、二年もたなかつたじゃない。

若宮

兄さんは五年やっただけど、俺のほうが字がうまかった。

旭

いや、俺のほうがうまかったよ。

若宮

書道だけじゃない。釣りだって俺のほうがうまかった。いやいやいやいや、釣りも俺のほうがうまいって。

旭

兄さんはフナばかり釣ってて、俺はヤマベ釣ってた。

若宮

フナだって立派な釣りだろう。

旭

久しぶりに今度、一緒に行くか？

若宮

無理だよ。

旭

どうして？

若宮

俺はブタ箱行きだから！

旭

正志、なぜお前は志願するかのよう豚箱に行きたがるんだ？

若宮

無理だって。現行犯逮捕されてるんだから。

旭

怪我して止血で不起訴にしてやろうって言ってんじゃない！お前が捕まろうとしても、俺が絶対阻止してやるからな。

若宮

兄さんは自分の保身のために、俺を不起訴にしようとしてるだけ、俺がかわいいわけじゃない。

旭

わかってないな。確かに俺の立場はかなりまずい。でもな、弟を救ってやりたいという気持ちもあるんだよ。

八橋

兄さん！

八橋

このくだり、何回やってんだよ。

旭

八橋ちゃん、もう十分俺たちの兄弟愛を見ただろ。どうか俺たちを救ってほしい。

若宮

とりあえず、精神鑑定に持っていきましよう。そのほうが無罪を勝ち取れる可能性が高いです。弟さんには、この事情聴取で狂ってもらうしかありませんね。

旭

正志、できるか、狂った真似。

若宮

狂った真似ってなんだよ。

旭

今から裸になって、絶叫しながら、踊りまくるっていうのはどうだ？

八橋 裸は私が困ります。  
旭 じゃあ、雄たけびをあげよう。あーわわわわわわわ！  
若宮 あーわわわわわわわわわわ！  
旭 いいぞ、狂ってきた感じだ。八橋くん、きちっと書いておいてよ。  
八橋 わかりました。

八橋、帳面に書く。

旭 カトちゃん、ペっ！  
若宮 カトちゃん、ペっ！  
八橋 オヤジどもが。ネタが古い。  
旭 コマネチ！  
若宮 コマネチ！  
八橋 古すぎて寒い。  
旭 そんなに言うなら、八橋ちゃん、狂った真似、やってみてよ。  
八橋 はっ？ 私が。  
旭 そうお手本見せて。

八橋、旭の頬をひっぱたく。

旭 何するんだ、君は？  
八橋 取調べの刑事、いきなりひっぱたくなんて、頭狂ってるでしょ。  
旭 まあ、確かに。でもすっごく痛いよ。本意気で殴ってるよね。  
八橋 いろいろたまってますのでね。

若宮、旭をひっぱたく。

旭 どうして俺がお前にひっぱたかれなきゃいけないんだよ。俺が何か悪いことしたみたいじゃねえか。  
若宮 狂うためにはしょうがないよ、兄さん。  
旭 そうか、だったら、どんどん殴れ。  
八橋 (若宮に)一発ひっぱたいたくらいじゃ物足りないから、何発かひっぱたいておいたほうがいいですよ。  
旭 いや、これ以上、やったら暴行罪だって。  
八橋 逮捕しますか？  
旭 するわけないだろ。

八橋

じゃあ、もう、バシバシひつぱたいてもらいましょうよ。犯人が取調べの刑事殴るなんて前代未聞でしょうし、精神的に問題があるってことになるんじゃないですか？

旭  
若宮

よしっ、わかった。正志、どんどん殴れ。いや、でも兄さん。

旭

遠慮するんじゃない。思いつきりひつぱたけ。

若宮

それが、兄さんを守ることになるんだね？

旭

そうだ、俺が殴られることで、俺は助かるんだ。

若宮

じゃあ、兄さんのために思いつきり叩くよ。

旭

こいつ、正志、未来を自分で切り開け。

若宮

じゃあ、行くよ、兄さん。

旭

カモン、ブラザー！

若宮、旭を渾身の力でひつぱたく。

旭、倒れてピクリとも動かない。

八橋巡査が、旭の様子を見る。

八橋

意識ないですね。

若宮

死んでないよね？

八橋

たぶん。

若宮

兄貴が起きなかったら殺人犯になっちゃうじゃん。

八橋

それでもいいんじゃないですか、このバカ兄弟。

(幕)

## 「三途の天下人」

□登場人物

織田信長  
明智光秀  
豊臣秀吉  
徳川家康  
森蘭丸  
茶々（淀君）

三途の川の畔。

舞台中央に水溜まりがある。

織田信長が、地面に寝そべりながら水溜りを眺めている。

後ろに控える森蘭丸。

信長

蘭丸、今日もなかなか下界は楽しいことになっておるぞ。

蘭丸

左様でございますか？ 上様、今日ほどのようになっておりますか？

信長

裏切り者の明智光秀が、秀吉と合戦になったわ。どっちが勝ったと思う？

蘭丸

明智光秀は、信長様を裏切った悪の権現。秀吉様に勝っていた

信長

だきたいと思えます。

蘭丸

秀吉様が毛利攻めの最中のはず。よく間に合いましたね。

信長

あの、猿め。光秀に討ち取られた我のかわりに天下を治めるつもりだわ。農民が天下人とはこれは面白いことになってきた。

蘭丸

光秀は討たれたのですか？

信長

落ち武者狩りにあって、竹槍で突かれて死におった。

蘭丸

それは裏切り者らしい最後でありますな。

信長

三途の川の行列にほどなく光秀がやってくるであろうから、こ

い。

三途の川の見張りはそれがしにお任せあれ。

わしは、天下がどうなるか見届けてから三途の川を渡りたい。

蘭丸  
信長  
それまで蘭丸、生前同様、わしに仕えてくれ。  
御意！  
しかし、この水溜りは下界の様子がよく見えて、なかなか楽しめるわい。

蘭丸、ふと前面の何かに気付き、走り去る。  
蘭丸、明智光秀を連れてくる。

光秀  
蘭丸  
痛い、痛い、痛い！ 髪を引っ張るではない。  
この森蘭丸、いつお前が三途の川を渡るのか、ずっと見張っていたのだ。この裏切り者め！

信長、起き上がった

信長  
光秀  
信長  
おおつ、光秀。思ったより、こっちに來るのが早かったのう。  
ひつ、これは信長様！  
まさか、おぬしが本能寺を急襲してくるとはほんのこれっぽっちも思っていなかったが、光秀にしては思い切ったことをしよったなあ。

光秀  
信長  
それは上様が、丹波の国を私から召し上げると申されたからです。領地がなければ、それがし家臣を食わせていけませんぬ。だから、毛利攻めして、奪った領地はお前にやる、と申しただけではないか。

敵の領地を家臣に分け与えると申すのは理不尽極まりない。ええい、信長め。おぬしの首を見ながら、一杯酒でも飲んでやろうと思っておったのに、本能寺から首が出なかった。誰ぞ、首を隠したのか！

上様の首を取られてたまるか、とそれがしが介錯（かいしやく）したのち、側近に首を持たせ、逃がしただけのこと。

やはり、蘭丸、貴様の仕業であったか！

まあ、光秀、落ち着け。もう三人とも死んでおる。おぬしに切腹申しつきたいところだが、死んでしまつて腹も切れまい。

（光秀に）上様は、ずっとこの水溜まりから、下界の様子をご覧になっていたのだ。すべてわかつておるのだぞ。

何！ あそこから下界が見えるのか？  
試しにご覧になつてみては？

光秀、水溜りをのぞきこむ、

光秀

信長

光秀

信長

蘭丸

光秀

信長

光秀

信長

光秀

信長

蘭丸

信長

光秀

信長

光秀

信長

光秀

蘭丸

光秀

こ、これは！

わしも死に、おぬしも死んで情勢は秀吉に傾いておる。

秀吉め、上様の次男ではなく孫の三法師様を担ぎだしたおったか。

上様？ わし、おぬしに上様って呼ばれる筋合いはない。

そうじゃ！ 上様を裏切っておいて、上様と呼ぶのはおかしい。

それでは何とお呼びすればよろしいのか？

信長様だな。

それではこれよりは、上様を信長様とお呼びいたします。

秀吉も秀吉だな。わしの孫など担ぎあげて、その後見役となり天下を牛耳（ぎゆうじ）ろうとする魂胆が見え見えだわ。あの猿に簡単に天下を取らせたくない。

そうやすやすとは事は運びますまい。信長様の次男、信雄殿もおれば、三男の信孝様もおられる。ほう、柴田勝家殿は、三男の信孝様と手を組んで秀吉に対抗しようとしておる。

わしの次男と三男でこれは戦になるであろうな。嘆（なげ）かわしきことよ。

相続争いは、戦国の世の常にございます。

光秀殿はどの目線からそのようなことをしれつと申しておるのですか。すべては明智殿が本能寺に火をかけ、上様を殺害したゆえ起こっている天下騒乱なのですよ！

光秀、わしはお前に聞きたい。主君を謀反（むほん）で葬り去り、そのあと天下を取れると思っておったのか？ おぬしの頭なら謀反人としてわしの家臣どもが敵討（かたきう）ちに来ることぐらい想像できたであろう。

もちろん、想定は致しておりました。しかし、領地没収を何の咎（とが）もない私に信長様は行いました。信長様の元において、いつかそれがしは殺される。それならば、いま信長様を葬り去り、戦うしかないと思腹を決めたのです。

わしをそこまで恐れていたのか。

恐れておりました。それがしは追い込まれ、100のうちの1に運命を託すしか方法がなかったのです。

なるほど……。

口惜しや。徳川殿と長曾我部殿が味方についてくれさえすれば、戦に勝つたものを……。秀吉が早すぎた。

徳川殿？ 徳川殿もこの裏切りに加担していたと申すか！

徳川殿は、息子の信康様を信長様に殺されております。徳川殿はずつと信長様を討ち取る機会を待っておられたのです。

信長 これは、家康にも、話を聞かんといかんなあ……。  
蘭丸 これで、また成仏の機会が遠のいた。  
信長 証人として、光秀、貴様もここに残れ。  
光秀 残りましょうとも。それがしも家康殿にお聞きしたいことがございませう。  
蘭丸 家康が死ぬのはいつのことになろうやら。何年ここで待てばよいのやら……。  
信長 蘭丸、安心せえ。実はこの下界への水溜りだが、こうやって、右から左に水面（みなも）を撫でると、一年ほど時代が移り変わる。  
蘭丸 そうなのですか！ なぜ上様はそれを私に黙っておられたのです？  
信長 わしはじっくり下界を見たいのだが、おぬしが成仏、成仏とうるさく言うからじゃ。  
蘭丸 なんと！  
信長 わしが死んで天下はどうなるのか。それだけは見届けたい。

信長、水面を右から左へ撫でる。

信長 おおつ、秀吉と勝家が合戦をしておるわ。猿め、勝家まで亡きものとするつもりか。  
光秀 どちらが優勢でございますか？  
信長 秀吉じゃな。わしの多くの家臣は秀吉になびいておる。  
光秀 猿め、百姓上がりの分際で天下を取るつもりか！  
蘭丸 このような事態になったのは、すべて光秀殿が謀反など起こしたからですぞ！  
信長 光秀、おぬし、切腹したことないから痛み、わからんだろ。あれは痛むぞ。内臓が全部、出ちゃうかと思っただわい。  
蘭丸 腸がこっそり出ておりましたか。  
信長 何？ 出てしまっていたか。  
蘭丸 はい、見るに絶えず、すぐに介錯いたしました。  
信長 もう、あれだ。あまりの痛みでわしも意識失ってたな。

信長、蘭丸、光秀をじっとみて

光秀 なんでござる？  
信長・蘭丸 お前のせいだ！  
光秀 裏切りは下剋上の常。それがしも竹槍に突かれ、痛い思いはしたのです。

信長 最後、落ち武者狩りの竹槍に突かれて死ぬなんて無様で笑ったわい。  
光秀 おのれ、信長！ わしを愚弄（ぐろう）するつもりか！  
蘭丸 光秀殿らしい最後でございますな。  
光秀 おのれ、蘭丸、貴様まで！

光秀、刀を抜くが、

信長 光秀、そのようなものをこの天界で出してどうする？ 霊は刀では斬れんぞ！  
光秀 うぬぬ……。  
蘭丸 斬れるものなら、とつくに光秀、お前を斬っておる。  
光秀 蘭丸、貴様に光秀などと呼び捨てにされる筋合いはない。  
信長 裏切り者が偉そうにするでない。  
光秀 うむ、もつともじゃ。  
……。

光秀、齒ぎしりしながら、刀を収める。

信長 ああ、そうこう話しているうちに、秀吉が柴田勝家を倒してしもうた。お市まで道連れにされた。  
蘭丸 秀吉め、上様の妹君（いもうとぎみ）を自害に追い込むとは！  
信長 勘弁ならん。

信長、蘭丸、じつと光秀を見る。

光秀 なんてござる？  
信長・蘭丸 全部、お前のせいだ！  
……。  
信長 蘭丸、柴田勝家とお市がほどなく三途の川に来ると思うが、こちらには呼ばず、そつと成仏させてやってくれ。  
蘭丸 かしこまりました。  
光秀 柴田様がやられては、もう秀吉に対抗する勢力がありません。  
信長 いや、まだタヌキがおる。  
光秀 タヌキ？  
信長 家康よ。あやつめ、世継ぎ争いにまったく無関心なフリをしておるが、ここぞというところを出てくるであろう。  
蘭丸 確かに家康殿が秀吉に屈するとは思えませぬな。  
信長 これは必ず合戦になる。

蘭丸 百姓上がりの秀吉が、武門一辺倒の徳川に勝てるのか、これは見物（みもの）ですな。

信長、また水溜まりを撫でる。

信長 始まったのう。

光秀 秀吉と家康の戦でございますか。

信長 家康め、律儀にわしの三男信雄を大将にして、秀吉と対峙しておるわ。

光秀 表向きは、三男、織田信雄様を旗印とする徳川。

信長 家康も魂胆が見え透いておるわ。あくまで織田の後継者を擁護する立場を見せて、実権は自らが握るつもりであろう。

蘭丸 猿とタヌキの合戦ですな。ここはどのあたりですかな？

光秀 おそらく、小牧、長久手あたりにございます。それがし若き頃は諸国を流浪しておりましたので地理にはくわしいのです。

信長 どちらが勝つと思う？

蘭丸 陣容を見る限り、秀吉は8万の手勢、家康は多く見積もっても3万。兵力だけ見れば秀吉が圧倒的に有利。

信長 大義があるのは家康のほうじゃ。わしの息子を立てておる。しかし、どちらも動かん。

光秀 待っているのはございませぬか？

信長 待っている？

光秀 秀吉がこの戦に勝った後、実権を握るのは必定。これに反対する織田旧臣の勢力が挙兵するのを待っておるのでは？

信長、水溜りを撫でる。

信長 ほう、光秀、貴様の見立ては悪くない。一年経っても、まだ両軍対峙しておるわ。家康は、時間を稼いで風が吹くのを待っておる。

蘭丸 家康殿は合戦上手。猿ごときに負けはしますまい。

信長 次に三途の川に来るのは、秀吉か、それとも家康か……。

蘭丸 あっ、和解した！

信長 あの、馬鹿息子。秀吉と和解してどうする？ これでは、秀吉の天下になるではないか。

蘭丸 ああ、家康殿もため息をついておられる。大将に担ぎ上げた織田信雄様が、秀吉と和解してしまっは、家康殿の大義名分が

信長 なくなる。これは兵を引くしかありませんな。秀吉め。これで織田は滅びるのか……。

光秀

信長

光秀

信長

光秀

信長

蘭丸

信長

蘭丸

信長

光秀

蘭丸

光秀

信長

蘭丸  
信長

光秀  
信長

光秀  
信長

光秀  
信長

……

光秀、お前、いま笑っただろ？

笑っておりませぬ！

いや、笑った。織田が滅びると知って、心の内でほくそ笑んでいるのである。

それがしが謀反を起こしたのは、織田信長を亡きものとするため。織田の一族がどうなろうとそれがしの知ったことではござりませぬ。

信雄も阿呆じゃのう。一度、秀吉に反旗を翻（ひるがえし）ておいて、秀吉と和解。のちのちどんな扱いをされるかわかったものではない。どうやら織田の一族の中で、秀吉に対抗できるものはおらぬらしい。力あるものがのし上がっていく。それが戦国じゃのう。

信長様あつての織田家でござった。

その織田家を潰したのが……。

明智光秀。

もう少しで天下統一だったのに、やってくれたわ、なあ、光秀。

もう少しというのは気になりますなあ。中国の毛利、四国の長曾我部、九州の島津、関東の北条、越後の上杉、奥羽の伊達、まだまだ倒さなければならぬ相手が多くありました。

何を言うか。信長様の勢いなれば、すべて打ち倒すことが出来たわ。

信長様は死んだのです。今更、このような話をして意味もありません。

おお、秀吉め、四国、九州を制圧して、太政大臣（だじょうだいじん）になりおったわ。百姓が貴族の仲間入りだわ。あやつもなかなかやりおるわ。

信長様の家臣は、こぞつて秀吉についたというわけですな。

家康が、戦をやめてしまったからのう。おお、朝廷から豊臣の姓を賜（たまわ）ったか。

豊臣秀吉……。

光秀、お前が誕生させたようなものじゃ。競争相手だった秀吉の立身出世ぶりを見て、どう思う？

……。

悔しいか？

いえ。

悔しくないと申すか？



蘭丸、水溜りの水面を撫でる。

蘭丸 光秀、そなたの言うとおりになりましたな。上様、秀吉、北条を倒して天下統一でござる。

信長 そうか。できるなら、わしが統一したかったが、猿がやりおつたか……。

光秀 あの戦乱の世を終わらせるとは敵ながらあっぱれ。

蘭丸、水溜りの水面を撫でる。

蘭丸 上様、驚きでございます。秀吉は明の征服に乗り出しました。

信長、急いで水溜まりの場所に戻ってきて、

信長 明じゃと！ あやつめ、海を渡るか。

光秀 これは魂胆が秀吉にありますな。

蘭丸 魂胆とは何でござるか？

光秀 戦乱が終われば、武士の刀は用済みでござる。戦馬鹿（いくさばか）の覇気のはけ口として明に攻め入ったのでしよう。

蘭丸 なるほど。明に攻め入れれば、諸侯は武器や金を使う。国内で暴れ出すのを止めようというわけですな。

光秀 徳川などは、疲弊させられてはたまらぬ、と明出兵を渋っております。

信長 明を征服できるか見たくなってきた。

信長、水溜りの水面を撫でる。

光秀 これは！

蘭丸 惨敗ですな。

信長 やはり明は強いか。

蘭丸 上様、見てください。明出兵の失敗のショックで秀吉は、尿を漏らしております。

信長 この様子では長くないのう。

蘭丸 どういたしましょうか？

信長 蘭丸、秀吉が三途の川に来たら、ここへ呼べ。あやつには文句の一つ、二つ、言っておきたい。

蘭丸 はっ！ さっそく迎えに行きます。

信長 うむ。

蘭丸、立ち去る。  
蘭丸、豊臣秀吉を連れてくる。

秀吉 なんじゃ、なんじゃ。おぬし蘭丸ではないか。

蘭丸 上様が、お話しがあるとのことです。

秀吉 上様!? 信長様が待つておるのか。

蘭丸 左様でございます。ちなみに明智殿もおられます。

秀吉 いや、上様に合わせる顔はない。三途の川を渡らしてくれ。

蘭丸 秀吉様、ここには不思議な水溜まりがありましてな、下界の様

子がよく見えるのです。秀吉様亡き後、天下がどうなるか見て

いきたくありませんか?

秀吉 なんと、そのような水溜まりがあるのか。それはぜひとも見て

おきたい。

信長 秀吉、久しぶりじゃのう。

秀吉 こ、これは上様!

信長 天下を統一し、太閤(たいこう)まで名乗り偉くなったのう。

秀吉 ここまで来れたのは誰のおかげじゃ。

信長 上様のおかげにございます!

秀吉 さすがにわしの前ではふんぞり返ることもできぬか。

信長 まさか、天界で上様にお会いできるとは夢にも及ばなんだ。

秀吉 お市、茶々の件でおぬしには話があつてのう。ずっと待つてお

つたのだ。なぜわが妹を自害に追い込んだ?

秀吉 お許しくださいませ。お市様は敵方におられましたので、自害

を止めることかなわず……。

信長 たわけ者め! そちのお得意の策略を持つてして、城から逃が

すこと、出来たはずじゃ!

秀吉 策は講じたのです。しかし、お市様は城を出るとは申さなかつ

たのです。

信長 おぬしの側室にされるのが嫌だったのであろう。

秀吉 それもあつたと存じます。

信長 で、お市の娘の茶々を側室にしたのか。蘭丸、刀、貸せ。

蘭丸 はっ!

蘭丸、刀を差し出す。

信長、秀吉を斬る。

秀吉 ぎゃっ!

秀吉、倒れこむ。

信長  
秀吉  
信長  
秀吉  
信長

立て、秀吉。天界で刀など用を為(な)さぬ。  
(立ち上がって)おっ、あらっ、斬れてない。  
そういうことじゃ。

びっくりいたしました。  
何がびっくりじゃ。びっくりさせられたのはわしのほうだわ  
い。茶々19歳、おぬしは50歳。茶々が可哀そうではない  
か！茶々は母のお市をおぬしに殺されているのだぞ。茶々の  
の心中(しんちゅう)を思うと、この信長も目がうるおって  
くるわい。

秀吉  
信長  
秀吉

申し訳ございませぬ！お市様への思い、この秀吉、生涯忘れ  
ることが出来ず、お市様の娘の茶々に想いを募らせたのです。  
この馬鹿者めが！！  
申し訳ございませぬ！

蘭丸、水溜りの水面を撫でる。

蘭丸  
光秀  
秀吉

何やら、豊臣の家臣同士で大戦(おおいくさ)になっておりま  
すぞ。  
この地形を見る限り、ここは関ヶ原辺りであろう。  
なんじゃ、何の戦が始まったのじゃ！

秀吉、水溜りをのぞきこむ。

秀吉  
蘭丸  
光秀  
秀吉  
光秀  
秀吉  
光秀  
秀吉  
信長  
秀吉  
光秀

光成か、石田三成と……相手は徳川家康！家臣同士で戦を始  
めるとはどういうことじゃ！  
おそらく、家康殿は、反対派を駆逐して実権を握るおつもりで  
すな。上様がなくなったときと変わらず、家督争いでござる。  
力あるものがのしあがっていく。秀吉殿がなされたのと同じこ  
とを家康がしておるのです。  
そういうおぬしは、明智殿ではないか。久しいのう。  
山崎の合戦では完敗でござった。  
なぜ、上様を裏切った？  
その話はもうやめておきましょう。昔のこととござる。  
まさか、わしも天下人になるとは思ってもおらんのだ。  
百姓上がりか太閤など名乗りおって。  
申し訳ござりませぬ。  
じきに豊臣も滅びますな。いま、力あるものは徳川家康でござ  
る。秀吉殿の嫡男、秀頼殿はまだ7歳。家康に太刀打ちなどで  
きるはずもございませぬ。

秀吉 家康殿には、秀頼のことは頼むと強く伝えてから死の床についた。

光秀 そのような口約束が通らぬこと、秀吉殿はよくお分かりになっているはず。この戦、家康殿が勝てば、実権は家康殿が握ることになりましょう。

秀吉 五大老、五奉行制で政（まつりごと）を行なえば盤石かと思っただが、やはり家康は消しておくべきであった……。

蘭丸 どうやら、この戦、家康殿が勝ちましたな。

光秀 これで政（まつりごと）の実権は家康殿が握りましたな。お

お、あれよあれよと言う間に徳川殿は幕府を作りましたな。お豊臣完全無視でござる。

ぐぬぬぬぬ。あやつめ、勝手なことをやりおって。

信長 蘭丸、水面を撫でよ。

蘭丸 はっ！

蘭丸、水溜りの水面を撫でる。

秀吉 なんと！！ 大坂城が燃えておる。

光秀 茶々様も息子の秀頼様も自害の様子ですな。

秀吉 おのれ、徳川家康！

信長 下剋上じゃのう。茶々が自害とは……。

秀吉、大声で泣き始める。

秀吉 家康め、ただでは済まさんぞ。上様、それがし、家康がここに来るのを待ちとうございます。

信長 勝手にいたせ。

秀吉 はっ！

蘭丸、ほどなく茶々が来るであろうから、三途の川を渡る前に連れて参れ。

信長 はっ、ではそれがし、お迎えに参りまする。

蘭丸 うむ。

蘭丸、走り去る。

秀吉 それにしても、裏切り者の光秀がなぜ上様とここにおるのじや？

光秀 本能寺の変について、信長殿が徳川殿にも話を聞きたいと申されて、それがしにも残るように言われたのです。

信長 秀吉、わしの見立てではのう、本能寺の変は徳川も一枚噛んでおる。

蘭丸、茶々を連れて戻ってくる。

茶々 叔父上様！

茶々、信長に抱き着く。

信長 おうおう、茶々、久しぶりじゃのう。立派な女子（おなご）になったのう。

茶々 叔父上様、お会いしようございました。

秀吉 茶々、わしじゃ、秀吉じゃ！

秀吉、茶々に抱き着こうとするが、茶々は拒む。

茶々 殿下は、父と母の敵（かたき）でございます。  
今さら！？

茶々 加えて加齢臭。口の臭さ、息の臭さ。すべてが嫌でございます

信長 そうじゃそうじゃ、50超えてから若いそなたを側室にするとは、最低な男だとわしも思っておったのだ。

秀吉 今さら！？ 子供もいたのに今さら！？  
叔父上、茶々は秀吉が大嫌いでございます

茶々 そうじゃろう、そうじゃろう。猿と美女では似合うはずもない。わしが生きておればのう、このようなことにはさせなかつたのだが。

秀吉 茶々がわしのことが嫌いだったなんて！  
天下人ゆえ、怖くて言えなかつたのです。

茶々 天下人になった猿を拒めばどのようなことになるかわかりませからな。茶々様もよく我慢なさいましたな。

茶々 二人の妹にも危害が及ばぬようにと、私は自分を殺したのでございます。

秀吉 えっ、茶々はわしといて死んでいたのか？

茶々 ええ、生き抜くために、皆のために自分を殺してあなた様とともに暮らしたのです。

秀吉 茶々、悲しいことを言わんでくれ。わしはおぬしのために城まで築いたではないか。

茶々 あのような城、必要ありません。

秀吉 なんと!?  
茶々 子を産むためなら、大坂城で十分でございます。  
秀吉 光秀、だめじゃ、わしは立ち直れぬ。

秀吉、光秀によりかかる。

光秀 おのれの身分をわきまえぬゆえ、このようなことになるので  
す。

秀吉 わしは天下人じゃぞ。

光秀 人の愛は金(きん)では買えぬということですよ。

秀吉 がっくりじゃ。しばらく立ち直れぬ。

茶々 最後は尿まで垂れ流すようになり、臭くて近寄れませなんだ。

秀吉 もう、茶々、そのあたりで勘弁してくれい。

茶々 死んでやっとな音を言うことが出来ました。つかえていた何か  
がすつきりいたしました。

秀吉 光秀、わし、切腹したい。

光秀 無理でございます。死者に刀は通じませぬゆえ。

秀吉 早く三途の川を渡りたいが、家康も勘弁ならぬゆえ、文句の一  
つも言わなければ成仏できぬ。

茶々 わらわも、家康には息子ともども自害に追い込まれましたゆ  
え、つばの一つも吐きかけとうございます。

光秀 それでは皆で家康殿を待つことといたしましたしょう。

蘭丸、水溜りの水面を撫でる。

蘭丸 上様、徳川家康殿、鯛の天ぷらにあたって、身まかりました。  
信長 鯛の天ぷら?!

光秀 天下人にしてはあつけない最後。

秀吉 さまあじゃな。くっ、くっ、くっ(笑う)。

蘭丸 家康殿もほどなくこちらに参るでしょう。

信長 光秀、秀吉、蘭丸、家康を見つけ次第、こちらに連れて参れ。

光秀・蘭丸 はっ!

茶々 家康め、あらぬ疑いを我らにかけて自害させたこと、叔父の前  
で釈明させます。

皆で四方八方を見て、家康を探している。

蘭丸 あっ、あれではございませぬか?  
秀吉 あれじゃな。あのタヌキ面は死んでも忘れておらぬ。

信長 蘭丸、連れて参れ。  
蘭丸 はっ！

蘭丸、立ち去る。

光秀 本能寺の一件、問い詰めねばならぬ。  
秀吉 本能寺の一件とは？  
光秀 徳川殿は、わしが本能寺で信長様を討ち取ったのち、長曾我部などとともにわしに味方する密約があつたのです。  
秀吉 なんと！？  
信長 家康め、食えぬやつとは思っていたが、そういうことであつたか。  
茶々 それでは家康は本能寺では信長様と明智殿を裏切り、大坂の陣では秀吉様とわらわたちを裏切つたということになります。  
光秀 と、いうことは、家康はここにいる全員を裏切っておりますな。  
信長 あのタヌキめ！ ただでは済まさぬ！

蘭丸、家康を連れてくる。

家康 なんじゃ、なんじゃ。もうわしは疲れた。三途の川を渡らしてくれ。

その前に、上様に会っていただきます。上様？

信長様にございます！

信長様はとつくに三途の川を渡っておるであろう。

いえ、皆で徳川様が来るのを待っております。

家康殿、おひさしぶりにございます。

その声は光秀！

徳川殿、偉くなられましたなあ……。

その声は太閤殿下！

家康、わしじゃ！

の、信長様！

家康殿、大坂の陣ではお世話になりましたね。

こ、これは茶々様まで！ わしは夢を見ておるのか？

夢ではないわ。ここは三途の川の畔じゃ。みな、おぬしを待つて川を渡らずに待つておつたのだ。

そうでございますか。しかし、それがし、何も申し上げること

はござりませぬゆえ、先に三途の川を渡ります。それではご

家康

信長

家康

茶々

家康

信長

家康

秀吉

家康

光秀

蘭丸

家康

蘭丸

家康

蘭丸

家康

めん！

家康、立ち去ろうとするが、秀吉と光秀が捕まえて、強引に座らせる。

秀吉

よくも息子の秀頼と茶々を殺してくれましたな。

家康

殿下、ああしなくては天下泰平などのぞめなかつたのです。

秀吉

だまらっしゃい！ 言い訳など聞きたくはないわ！ わしの遺言を踏みにじりおって。

光秀

家康殿、征夷大將軍となり幕府まで開いて偉くなりましたなあ……。

家康

光秀、あれは違うのじゃ！

光秀

何が違うのです。本能寺の後、我にお味方してくれるお約束、いかがでしたのです。信長様も知っておりますぞ。

家康

……だから、いろいろ違うのじゃ！

信長

家康、隠し立てしても無駄じゃ、話は聞いておるゆえ。

家康

それがしは信長様を裏切っておりませぬ。この光秀がしつこく本能寺のあとと味方せよと申すので、そのようなことが本当に起こるなら考えましょう、と返したのです。

光秀

嘘をつくでない！ 「いま、本能寺を襲えば信長は確実に討ち取れる。信長を討ち取った暁（あかつき）には、お味方いたす」との書状があつたではないか！

家康

そのような書状、出しておらぬわ！

光秀、懐から書状を出して信長に見せる。

信長

確かに味方すると書いてある。

家康

その書状は偽物じゃ。だいいち、なぜ三途の川まで書状を持つてくるのじゃ！

光秀

家康殿に裏切られた怨念を抱いて討ち死にしたからでございましょう。竹槍で討たれる間際までこの書状はそれがしが懐に持つておつたのです。

信長

家康、光秀に味方すると申してわしを討たせ、その光秀も裏切つて天下騒乱を起こし、自身は傾合いを見計らつて天下を狙つた。そうであるな？

家康

違います。

信長

家康、そこまでわしが憎かつたか！

家康

憎んでおりませぬ。これは何かの間違いでござる。

信長

家康、わしはおぬしと何度も書状のやりとりをしておる。この書状、間違いなくおぬしの筆跡じゃ。

家康

どうして死んでまで本能寺の責めを受けねばならぬのか。

信長

この裏切り者め。

茶々

そうじゃ、この裏切り者め！ 豊臣を守ると申しておきながら

茶々

あらぬ疑いをわらわたちにかけて、大坂城を攻めた！

秀吉

茶々、あらぬ疑いとはなんじゃ？

茶々

秀頼が方広寺を建てなおした際、寺の鐘に「国家安康」と彫ら

家康

せたのですが、家と康の字を分断し、徳川を呪っていると難く

秀吉

せをつけてきたのでございます。

家康

……。

秀吉

家康殿、それは真(まこと)か？

家康

はて？ そんなことがありますかな。

茶々

わらわが言っているのですから間違いありません。それを口実

信長

にして、徳川は豊臣に戦を仕掛けてきたのです。

家康

家康、真(まこと)のことを申せ。おかしい言いがかりを豊臣

秀吉

につけたであらう！

家康

言いがかりでござる！

秀吉

では、なぜ、豊臣攻めなど出来たのじゃ。理由がなければ、主

家康

家に弓引くことなどできぬではないか！

信長

はて、何が何やらわかりませんなあ……。

家康

どうしてもしらを切ると言うのなら、ここで成敗してくれる。

信長、刀を抜く。

家康

お待ちくだされ、上様！

信長

おぬしを天国に旅立たせるなど、仏が許してもわしが許さん！

家康

やりました、やりました。言いがかりをつけました！

信長

わしの姪の茶々をいじめおって。許さん、地獄へ落ちろ！

信長、家康を斬る。

家康

ぎゃっ！

秀吉

……わしのとときと同じやり方。

信長

家康、安心せえ。

家康

あらっ、おっ、斬れてない。

信長

わしらはもう霊になっておるゆえ、刀など何の役にも立たんのだ。

家康

先に言ってください。

信長 言いがかりをつけた罰じゃ。  
それにしても、ひどい言いがかりですな。そんなことで主家の

蘭丸 豊臣家を攻めるとは……。

秀吉 家康殿、豊臣を頼むとわしはおぬしに申したではないか。

家康 太閤殿下亡きあと、五大老五奉行制ではもろもろ立ち行かぬゆ

え、それがしが実権を握ったのでござる。その甲斐あって、今  
は戦のない平穩無事な国が出来上がったのです。

秀吉 裏切り者が偉そうなことを言うでないわ。おぬしがしつかりと  
秀頼を支えてくれれば、豊臣が天下を収めること可能であつた  
わい。

家康 太閤殿下、恐れながら、国家安泰のためには、豊臣と徳川が双  
方並び立っていては無理だつたのです。

秀吉 やはり、おぬしは殺しておくべきであつた。きつとこうなるだ  
ろうと恐れていたのじゃ……。

家康 太閤殿下に命が狙われていることなど、とうにわかつておりま  
した。それがしはそれをなんとか交わし耐えに耐え、天下を取  
つたのでござる。

光秀 しかしな、家康殿、天下を取つたと思つても時が過ぎればまた  
違ふ者が天下を治めている。その水溜まりを撫でてみよ。徳  
川は滅んでおるかもしれん。  
……。

家康

家康、水溜りの水面を撫でる。

家康 二代目の秀忠が幕府を支えております。  
蘭丸 もつと撫でて見よ。

家康、水面を撫でる。

家康 三代目の家光が幕府を支えております。  
蘭丸 あれつ、これ、ずっと徳川が治めてゆくのかな？

蘭丸、何回も水面を撫でる。

蘭丸 信長様、どうやら長きに渡り、徳川が天下を治め、戦がなくな  
つております。

信長 さようか……。

光秀 我らが戦い抜いたのち、戦国は終わり、平穩な日々が民百姓に  
参っているのだな。

蘭丸  
秀吉  
そのように見受けられますが……。

蘭丸  
茶々  
天下泰平の世が参ったと申すか？  
いくら水面を撫でましても、徳川が天下を治めております。  
悔しいかな。わらわと秀頼は自害に追い込まれ、徳川が天下泰

茶々  
平を成し遂げるとは……。

家康  
信長  
無数の屍（しかばね）の上に立てた天下泰平でござる。  
どうするか。許すも許さないも、下界は変わらん。

光秀  
それがしは、そろそろ三途を渡らせていただく。言いたいこと  
は信長殿と家康に言え申した。

秀吉  
茶々よ、もうこれ以上、ここにおっても意味はない。わしらも  
行くか？

茶々  
家康殿、三途を渡りましても、わらわと息子を自害に追い込ん  
だ恨み、忘れませぬからな。

家康  
あいわかり申した。

光秀  
信長  
では信長殿、それがし参ります。  
うむ。

光秀、去る。

秀吉  
では、上様、それがしどもも参ります。

茶々  
茶々は叔父上と参ります。

秀吉  
今さら！？

茶々  
叔父上、さあ、参りましょう。

信長、茶々に連れられて去る。

秀吉  
蘭丸、おぬしはどうするのじゃ。

蘭丸  
それがし、もう少し、この水溜まりから下界を眺めとござい  
ます。

秀吉  
さようか。それならば、わしは行かせてもらう。三途の川のあ  
ちら側でまた会うこともある。さらばじゃ。

秀吉、去る。

家康  
蘭丸、最後の最後でとんでもない目に合ったわ。まさか信長  
様と太閤殿下が待っているとは夢にも思わなんだ。

蘭丸  
天下人をあれだけ裏切れれば地獄行きかもしれませぬぞ。

家康  
それもよからう。生きてるときも地獄であった。安らかに眠り  
たいがの。さらばじゃ。

家康、去る。

蘭丸、ものすごい勢いで何度も水溜りを撫で、

蘭丸

スマホ！ なんだこれは？

(幕)